# 社会ー空間弁証法

エドワード・W・ソジャ
(水内俊雄　訳)

Edward SOJA
Socio-spatial dialectic
*Annals of the Association of American Geographers*, 70, 1980, 207-225
© 1996 by Blackwell Publishers

**摘要**　またその揺籃期にある批判理論の発展を窒息させるかもしれない、より厳格で正統な流れというものが、マルクス主義的空間分析のなかに現れてきた。社会ー空間弁証法という概念は、随伴現象以上のものとして、つまりその議論の再開の手段として、およびマルクス主義的分析における空間の社会的生産の明確な統合を求めるものとして導入されたのである。アンリ・ルフェーブル Henri Lefebvre、エルネスト・マンデル Ernest Mandel、およびその他の諸研究に依拠しながら、普遍的な空間的問題構制が同定され、そして都市・地域双方の政治経済の文脈のなかで議論される。空間的問題構制は階級分析の代替にはならないが、現代資本主義の階級意識・階級闘争において不可欠でますます重要な要素となり得る。

空間とその政治的組織とは、社会的諸関係を表徴するが、しかし、後者に反作用もする。…工業化は、かつてはアーバニズムの形成要因であったが、今日では後者によって促進されている。…われわれが「都市革命」という用語を用いる場合、それは、現代社会のすみずみまで行き渡って、変化つまり経済成長と工業化に対する問題が優勢であった時代から、都市的問題構制が決定的になる時代への移行を惹起するような変化の総体のことを意味しているのである。

如上の観察は、ディヴィッド・ハーヴェイ David Harvey が『都市と社会的不平等』に記した後書きから引用したものであるが、この本で彼は、フランスの社会哲学者、アンリ・ルフェーブルのアーバニズム、空間の組織化、現代のマルクス主義分析などについての考えを、簡潔に賞賛するとともに批判している [1]。しかし、ハーヴェイの評価には、それ以上のものがある。このようなハーヴェイの評価の仕方は、ルフェーブルの批判的空間理論に対しての、マニュエル・カステル Manuel Castells の優れた著作、『都市革命』を通してすでにフランスでみられた反応とよく似ている [2]。ハーヴェイはルフェーブルを称揚してはいるが、現代社会において空間が構造的な作用力をもち、空間は「決定的」で「顕著な」役割を果たすというルフェーブルの主張を受容することは拒否しているのである。この点に関してはハーヴェイのマルクス主義的視座では、もう少しやんわりと主張されている。

ルフェーブルが物的所産としての空間組織と、アーバニズムの社会構造と空間構造の間の関係、さらには社会的に創られた空間のもつイデオロギー的な内容などを見事にそして洞察豊かに扱うことで貢献していることを彼らは認めている。しかし、ルフェーブルはいささか度を過ぎているに違いない、と疑ってもいる。ルフェーブルが都市の空間的問題構制を、耐え難いほど中心的で明確な自律性を備えた地位にまで押し上げたのである。空間的諸関係の構造があまりに強調される一方で、(循環と消費に対する) 生産と、生産の (空間的関係に対する) 社会的関係、そして (金融資本に対する) 産業資本などの持つ、一層基底的な役割は、もう一方の過度に評価されたもの、すなわちルフェーブルの「都市革命」と呼んだものの中に埋没されたままだった。彼らにとってルフェーブルは、この都市革命の概念化に際して、根底的な社会変革の背景をなす動因として、階級紛争をあげずに空間的 (または) 領域

的紛争を代わりに持ち出そうとしているように見えたのである。百年以上もの間、正統マルクス主義研究者はこのような階級闘争から目をそらそうとする修正主義者の試みに抗してきたのが常であり、ルフェーブルに対しても例外ではなかったのである。

1973 年当時のハーヴェイにとって重要な問題は、（アーバニズムというコンテクストでの）空間的組織は、「それ自体の内的な変化と構成の法則を備えたある切り離された構造」なのか、それとも「（例えば、生産の社会的諸関係のように）何かより広汎な構造の中に根ざした一群の諸関係の表現」なのか、ということであった。ハーヴェイやカステル、またその追随者たちにとって、ルフェーブルは前者の考え方をもっており、したがってマルクス主義者が伝統的に空間の「フェティシズム」と呼んできたものに、彼が屈伏しているように思われた――すなわち、社会的関係の構造やそれを生成する生産過程から切り離された、歴史や人間行動を自律的に決定してしまうような空間的関係の構造の中で創造されると――。こうして、マルクス主義に明快かつ迫力ある空間解釈を導入することに関わった多くの人々は、マルクス主義を厳密かつ厳格に応用しようと苦闘する過程で、ラディカルな空間分析が決して越えてはならない、ある境界を確定し始めたのであった。

このエピソードは、ネオマルクス主義的空間分析に普及した兆候の一部であり、それはそのインパクトを大いに鈍らせ、その成果を著しく弱めたと私は考えている。20 世紀の主導的な空間理論家のひとり、ルフェーブルに対する反応は、有力な対抗議論を提示するに十分な硬直化した傾向と因果関係を宣言しているのにとどまる。私はここでより広範な前提というものを議論するために一歩進めて次のように言ってみる。つまり、空間をはっきりした形で捉えようとしたマルクス主義的分析の最近の出現は、例えば、ハーヴェイとカステルの仕事に最もよく現れ、また近年急増してきたラディカルな都市・地域的政治経済に関する文献にも広げられるが、不必要なまでに限定され不適切な空間および空間関係概念を組み入れてしまっている。こうして、マルクス主義的空間分析がもつ理論と実践に秘めていると[illegible]される広範な意義は、空間的フェティシズムを回避しようとするラディカルな学者たちの意図はよいが、近視眼的な努力によってわかりにくくされていると私は主張したい。

いささか皮肉なことだが、誤解の主な原因は、マルクス主義分析家が生産と消費のような構造的に結びついた諸領域の間の弁証法的特質だけでなく、社会的諸関係と空間的諸関係の間にもみられる本質的に弁証法的な特質を評価できなかったことにある。その結果、社会ー空間弁証法を規定する対立、統合、矛盾の混在状況を深く探らずに、いずれかが因果的な優位性をもつかというような空虚でありきたりな疑問の方に着目したのである[3]。社会ー空間弁証法は、デイヴィド・ハーヴェイによってルフェーブルに押しつけられたふたつの主義（訳者注：空間的分離主義と空間的フェティシズム）のいずれにもフィットしないのである。組織化された空間の構造は、それ自身の構成と変化の自律的な法則を備えた独立した構成体ではないが、さりとて生産の社会的（したがって非空間的）な諸関係から現れる階級構造の表現に過ぎないというわけでもない。そうではなくて、組織化された空間は、生産の関係全体、つまり、社会的であると同時に空間的でもある諸関係から弁証法的に規定された構成物である[4]。

したがって、伝統的に規定された階級関係と、それから階級対立や構造的変化とに一致するような、全くもって顕著な空間的相同物が存在することが明確に例証されなければならない。このような生産の空間的関係の相同的構造は、支配的な中心と従属的な周辺とに組織的に分割されたところに存在すること、つまり地理的な不均等発展という概念の中にもっと正確に捉えられることを提示したい。しかしこのことが、生産の空間関係もしくは中心ー周辺構造が生産の社会関係（訳者注：階級関係）から分離し独立しているということを意味しない。むしろ逆に、この二組の関係は（訳者注：社会的なものと空間的なもの）、相同的であって両方とも生産様式に存在する同じ源から生じるばかりでなく、弁証法的にもねじれあい不可分の関係にあるのである。

生産様式の垂直的次元と水平的な次元とでも称されるようなものの間に、このような弁証法的な相同性が存在しているということは、マルクスとエンゲルスの著作で指摘されている。つまり、それは、都市と農村の間の対立とか、労働の領域的分業、産業資本主義における都市的居住空間の断片化、資本主義的生産にみられる地理的不均等、地代と私的所有の役割、剰余価値の地理的移転、自然の弁証法などに関する議論の中で行なわれている。しかし、マルクス主義の 100 年

間は、この手の議論の論理とその視野を発展させることに失敗してきた[5]。実際、ブルジョア社会科学の勃興時に起こったことと似たようなプロセスで、そしてそこでは重要な空間的な分析枠組みは沈積し、その社会的基礎から空間的組織が結合されないまま、マルクス主義は適切な空間的視点なしに進展し、理論と実践の両者において、もっぱら社会学的ー歴史学的な――これに対抗してハーヴェイが地理的と感覚的に呼んだ――「想像力」のもとで棲息してきたのである。最近のより明快な空間的マルクス主義的分析が登場してきた領野においても戦いづらいままであり、このこと自体が様々なことに反映してくる。たとえば、空間的フェティシズムの叫び、それぞれの用語法・強調点・信頼の置き所などをめぐる意見続出や、非生産的な議論そして混乱、あるいはもっと統一されたひとつの空間政治経済に統合できるのに、都市、地域、国際政治経済がそれぞれ分断されたままであること、空間的に明示的なラジカルな政治経済の再生が、「新しい」都市社会学、「新しい」地理学、「新しい」都市政策、「新しい」計画理論などを代表するという多様な主張などである。こうした学問上の区分けよりもっと広範な、歴史的であると同時に空間的でもある弁証法的唯物論以上のものが、意味ありげに主張されているのかもしれない。

## 社会的所産としての空間組織

### コンテクスチュアル対創造された空間

まず、空間それ自体、コンテクチュアルな空間、社会に根ざした空間性、社会的な組織化と生産とによってつくられた空間、これらの諸空間をできるだけ明確に分別することから始める必要がある。唯物論的視角からみれば、機械的であろうと弁証法的であろうと、時間と空間とは、一般的な意味において、事物の存在の客観的な形態である。時間と空間と事物とは、複雑に結びついており、このような関係の特質は、哲学や認識論的な問いかけの歴史において重要な伝統的テーマであった。このような、空間をコンテクスチュアルにそして本質的に物的なものとみる見方は、あらゆる形態の空間分析、例えば、それが哲学的な分析であろうと、理論的なそれであろうと、実際的であろうと、また経験的なものであろうと、あるいは天体の運動に適用されようと、人間社会の歴史や景観に適用されようが、それらいずれの空間分析にも強く影響を与えてきた。また、われわれは空間的なものすべてに、本源的だとか、物的に構成され客観的で必然的であるとの感じを付与する傾向にあった。

このように空間は、一般的にも実存的な形態で、歴史と社会の唯物論的分析の概念として取り入れられたのであるが、このような捉え方のために、人文的な空間組織を社会的所産と解することが妨げられてきたのである。コンテクストとしての空間は、広範な哲学的関心を引き起こし、その絶対的特質と相対的特質について、人間生活の「容器」としての空間の特徴とか、空間の客観的に捉えられる幾何学や空間の現象学的本質などについての議論を生じさせた。しかし、このような空間は、人文的な空間性の具体的で主観的な意味を分析にするにはふさわしくない認識的な基盤であった。空間それ自体は本源的に所与のものかも知れないが、しかし、空間の組織や意味は社会的な解釈・変換・経験の所産である。社会的に創られた空間は、大地の生の中にある本来的な条件を変換させようとする、他の社会的構成体にも比較しうる創造的な構造物であって、この過程は、人類史が時間や時間性の社会的変換であるのと著しく似ている。同様の立場からルフェーブルは、所与のコンテクストとしての自然と、「第2の自然」と彼が名づけるもの、つまり、目的的な人間労働の適用から生じる、変換された社会的に創造された空間とを区別した[7]。このような第2の自然こそ、史的唯物論的な分析の主題と目的になる。

人間社会の空間的組織化は、人間行動の発展的な所産であり、至る所にあるコンテクスチュアルな空間、しかしながらそれからは明確に区別されうる物的な枠組みから生じる社会的構成体の形態でもある。残念ながら、この組織化された空間の社会的意味と起源に焦点をあて意味を伝えることは困難である。コンテクスチュアルな見方が空間分析に支配的であったため、我々の語彙までもが歪められているのである。それ以外には特定できないとしても、「社会的」「政治的」「経済的」、そして「歴史的」といった形容詞さえもが、人間行動や動機との関係を一般的に提示するが、空間的というタームは、社会的コンテクストや社会的行動には本質的ではない物的な何か、「環境」の一部分とか、社会によって創造される構造というよりはむしろ、その容器としての社会に対するコンテクストと言ったイメージを呼び起こしてきたのである。

われわれは実は、組織化された空間が内在的に持つ社会的な特質というものを表現することを広く受容されたものとしていない。特に「社会空間」といったタームは、多様でしばしば両立し難いような意味にまみれている。こうしたタームに関する議論に入る代わりに、本稿で使用する「空間」「空間的諸関係」「空間的諸構造」という言葉は、抽象的で本質的でない解釈ではなく、社会的に生産された空間の組織化を一義的にさしていると仮定しておきたい。たとえそれが、建造環境の形態、内容、分布パターン、生産や消費の中心の相対的立地、領域的管轄への空間の政治的組織化、収入や雇用の地理的な不均等な分布、あるいは位置的なシンボルや空間的イメージのイデオロギー的な愛着というようなものであれ、すべての組織化された空間は、社会的意味に満たされ、社会的なものにその起源を有するという見方をする。ルフェーブルは次のように述べている[9]。

> 空間はイデオロギーと政治と無縁な科学的な対象物ではない。空間は常に政治的で戦略的であった。もし空間が内容的に中立的で無関与というような様相を呈し、こうして「純然たる」形式のように見え、論理的な抽象作用からの要約物であるかのようであれば、それは正しく、空間が占拠され利用され、しかもその痕跡が景観に必ずしも常にはっきりとは残らないような過去の過程に焦点が当てられてきたからに他ならない。空間は歴史的要素と自然的要素から型取られてきたが、これらはひとつの政治的過程でもあった。空間は政治的でイデオロギー的なものである。それは文字どおりイデオロギーに満たされた産物である。

## 組織化された空間と生産様式

空間組織はひとつの社会的所産であるということ、つまり、それは目的的な社会的実践から生じるのだということが一旦受け入れられるようになれば、空間がより広範な社会的枠組みから独立した、構成と変化の法則を備えた独自な構造かどうかという疑問はもはや存在しない。唯物主義者的観点からみて重要になるのは、ある一つの生産様式内における創造され組織化された空間と他の構造との関係である。マルクス主義的分析を少なくとも３つの明確な指向に分割させたのが、このような基本的な論点であった。

まずひとつの流れとして、組織された空間の役割を評価して、確立されたマルクス主義的アプローチに挑み、ことにその経済的基盤と上部構造の既成の定義に挑戦するに至った視角に立つ分析があった。再び、ルフェーブルは重要な言明を与えている[9]。

> アーバニズムの諸事実は、それが資本主義で生じようが社会主義で生じようが、経済的基盤の表層にある何か上部構造的なものというように定義され得るだろうか。否である。アーバニズムの諸事実は、生産的諸関係を変えるには充分ではないかもしれないが、それらを部分的に変更させるのである。アーバニズムは生産力の一つになり、むしろ科学のようなものである。空間とその政治的組織とは、社会的諸関係を反映するけれども、しかし、後者に反作用もするのである。

ここにわれわれは、空間的諸関係の組織を上部構造の一部分を構成する文化的表徴としてのみ組織化された空間や空間的関係をみる通常のマルクス主義的定式化とは対照的に、経済的基盤の構造内で真の社会ー空間弁証法が作用している可能性を切り開いたのである。ルフェーブルによって上記文章の最後の分節で紹介されている重要な考え方は、社会ー空間弁証法の将来を基本的に約束するものとなった。すなわち、社会的諸関係と空間的諸関係とは、弁証法的に相互作用的かつ相互依存的関係にある。また、生産の社会的諸関係は、空間形成的であるとともに、空間偶有的でもある（少なくとも、われわれが組織化された空間を社会的に構成されたものとする見方を維持している限りそうである）。

これと同様の考えが、都市的枠組みとは対照的な地域的枠組みの中で、エルネスト・マンデルによって展開された。マンデルは、資本主義の下での地域的不均等に関する研究の中で、次のように言明する[10]。

> 地域と国家の間にみられる不均等発展は、資本による労働の搾取と*同じレベル*で、資本主義の本質そのものである。

マンデルは、不均等発展の空間構造を社会階級に起因させずに、それを「同じレベルのもの」とみて、ルフェーブルの都市的空間構造の解釈と極めてよく比較できる空間的問題構制を、地方的レベルと国際的レベルで提示する。そして、資本主義的蓄積に不可欠な空間的不均等から強力な革命的諸勢力が生じてくると指摘さえする。最近の彼の主要な著作の中では、資本の蓄積過程と資本主義それ自体の延命と再生産において、

地域的不均等発展が歴史的にきわめて重要であることに焦点をあわせた。そうすることで彼は、地域開発の政治経済に関して、これまで書かれたもののうちでもっとも厳密かつ体系的なマルクス主義的分析を提供したのである[11]。

しかしながらルフェーブルやマンデルは、より一般的な社会－空間弁証法や定式化を定義する規模縦断的な統合を試みようとしていたが、それはまだ不完全なままである。にもかかわらず、資本主義社会において「垂直的な」階級闘争、つまり労働と資本の間の直接的な社会闘争と通常は関連づけられてきたものに比肩するような重大な変化へのポテンシャルを、空間関係構造に帰してしまうことに対して、ルフェーブルもマンデルも、フェティシズム者、決定主義者とラベルを貼る他のマルクス主義者からの強い抵抗を引き起こすような視角を提示したのである。

このような、組織化された空間は、生産の社会関係を単に反映した以上のものであるという提議、つまり、そういう空間は生産様式に大きな矛盾を惹起し、それを変えるようなポテンシャルをもっているという提議、また、そういう空間は階級構造や階級関係にある程度まで相同的であるという提議、こうした提議に抵抗するもうひとつのもっと大きなラディカル学派が確定される。この集団には、「新しい」都市・地域政治経済学とは常に一線を画して、あるオーソドックスなマルクス主義を維持しようと試みている、近年ますます増加しつつある一群の批判家集団が含まれる。この集団に特徴的なことは、彼らが次のような信念を持っていることである。すなわち、ネオマルクス主義的分析は、より既成のマルクス主義的アプローチからみて本質的に新しいとされるものは何も付加していないし、伝統的な階級分析の中心性は神聖なものであり、こうして、ネオマルクス主義的な都市・地域分析の貢献は、面白いけれども、あまりにしばしば、許容し難いほどの改良主義になっており、分析的にもうまくいっていないという信念である。言うまでもなく、この集団によって堅持される空間の概念化は、過去1世紀のマルクス主義一般の特徴から異なるところはほとんどない。

しかしながら、これらふたつの両極の間あたりに位置を占める第3のアプローチが確認できる。その実践者たちは、暗黙裡には、ルフェーブルとマンデルによって記述されたのと非常によく似た考え方を受け入れているようにみえる。しかし、彼らの明確な選択をつきつめると、彼らは非空間的な社会階級の定義が優越するという考えを保持しており、時にはかれら自身の考察、強調や分析のもつ意味合い（含意）にわざわざ抵抗しようとさえする。以下の節で次のようなことを論争し、またより明らかにする試みを行いたい。すなわちこの集団（マニュエル・カステル、デイヴィド・ハーヴェイ、イマヌエル・ウォーラーステイン Immanuel Wallerstein が含まれる）、彼らは皆、私が定義したのと同じような社会－空間弁証法について最も洞察的な提示を行ない発展させてきた。だがしかし、現代資本主義に関連するような空間構造が果たす役割については、分析が弱く、脆弱な位置にその解釈を後退させてもいる。ルフェーブルやマンデルが時に社会－空間弁証法を強調しすぎるのに対して、この集団はそこから後退して、その意味や示唆もうまく捉えずに、曖昧模糊としたものを生み出しているが、これは今度は、もっとオーソドックスなマルクス主義の批評家たちによって反発されているのである。

最初に、例えば、カステルの最も影響力のある著作『都市問題』の中の空間概念を検討してみよう。なお、この著作の題名は、彼の以前の師であったルフェーブルの『都市革命』と対照させる意図的なものである[12]。

> 都市を社会の空間への投影と考えることは、不可欠な出発点であるとともに、あまりにも素朴すぎるアプローチである。というのは、われわれは経験主義的な地理的記述を越えて進まねばならないけれども、その際、空間を、その上に集団や制度機関が、過去の世代の痕跡以外のどんな障害物にも出くわさないで、自らの諸活動を刻印する白紙のようなものと想像するという非常に大きな危険を犯すからである。これは自然をまったく文化によって型取られたものとみるにほぼ等しい。しかし、社会的問題構制のすべてはこれらふたつのもの（自然と文化）の弁証法的過程を通しての不可分な統合によって生み出されるのである。このような過程を通して、ある特殊な生物種である「人類」は（ことに階級に分割されているので）、生活のための闘争と、自分たちの労働の成果を差別的に占有するための闘争において、自らと彼らの環境とを変えるのである。
> 空間は物的な所産であって、他の諸要素、とりわけ人間と関係している。人間は自ら特定の社会関係を取り結ぶが、この関係が空間に（そしてそれと結びついている他の諸要素）に、ある形態・機能・社会的意義を与えるのである。したがって、空間は社会構造の展開にとって単なるきっかけというにとどまらず、社会が特殊化されたもの、すなわちそれぞれの歴史的総体の具体的な表現である。だから、空間について、自らの存在と変化を支配するような構造法

則と結合法則、さらに歴史的現実をなす他の諸要素との特有な結び付きとを、他のなんらかの現実的な客体物についてと同様に確定できるかどうか疑問である。このことは、一般社会理論の構成部分ではないような空間理論は、たとえ暗示的なものであっても、存在しないということを意味する。

社会ー空間弁証法は、基本的には同じようなルフェーブル的見方を棄却し、それにかわるものとして簡潔に要約され提示されている。ここで述べられた議論を概念化するため、カステルのアイデアの拡張は、空間構造を、生産の根元と階級関係から切り離しているとして、彼自身が批判したルフェーブルと同じ過ちをしている改良主義者だと批判されることになる[13]。ここで言われている過誤は、カステルの著作で共同消費やその他の消費プロセスの空間的社会的側面に強調が置かれすぎていることにあり、生産というもっと基礎的な役割が埋没してしまっていることにあった。私は以下で生産ー消費の論点について意見を表明するが、しばらくカステルの「空間理論に関する議論」で試みられた解決法について考えてみたい。

カステルは確かに、空間を文化と自然、人と環境の関係に関係し、それを変換する弁証法的に立ち現れる物的所産とみなしていた。こうして、空間は社会構造の単なる反映でも、それが「展開する単なるきっかけに過ぎないもの」でもなく、諸事実の組み合わせの具体的な表現であり、相互に作用し合う物的諸要素と諸構造の「歴史的な総体」である。では、われわれは、どうすれば、このように創造された空間を理解し解釈できるのであろうか。そこへ至るルートは、「その存在と変化を支配する構造法則と結合法則」と述べたものを通じてある。

カステルとルフェーブルとを分かつものは、「特定の社会関係」が、空間構造と「その組み合わせをつくっている他の諸要素全体」に形態と機能と意義を付与するというカステルの仮定である。ひとつの「構造」、つまり非空間的と思われている社会的な生産関係（これには、財産所有権が含まれているが、やはり、それらの空間的・領域的な次元は無視されたままである）は、こうして決定的な役割を与えられた。なぜならそのような言い方をしないと、既成のマルクス主義的解釈とは対立するように見えたからである。しかし、「階級」がもし弁証法的な相互関係において社会的（垂直的）そして空間的（水平的）な生産関係や、労働の社会的そして領域的な分業を包含する『社会的問題構制」と関係づけられるとしたら何であろうか。生産の社会的関係と労働の社会的分業に関するマルクス主義的分析の深度と説得力、より特定すれば、資本と労働の間にある根本的で強烈な矛盾を、明快にそして体系的に統合してきた分析に太刀打ちできるような生産の空間関係の定式化が存在していないのは確かである。マルクス主義分析に空間の社会的解釈が強調されてこなかったことは、不変の事実なのか、侵されない法則なのか、あるいは歴史的プロセスの産物なのであろうか。

こうした質問は、生産様式と特定の社会編成において具体的に表現されるものから生じる、社会構造と空間構造の間の相同的弁証法的関係を証明するという今までの挑戦を単に再構成することとなる。現時点において厳格で包括的な社会ー空間弁証法を定式化する試みはまだ熟していないが、それにもかかわらずこうした主張や推測に付け加えられるべき内容はいくつかある。では次により特定の議論、空間理論に関する昨今の議論を形作っているいくつかの重要な概念に関する論点、まず最初に都市スケールで、次に地域ー国際スケールで展開してみたい。

## 都市の空間的問題構制*

都市スケールにおけるマルクス主義的分析は、都市化の政治経済に焦点を共通に当てるというこの特別な強調（経済学的、社会学的、地理学的）を引き寄せた大きな発展の一部として進展している。この発展の基礎には、先進資本主義における都市化プロセスの性質

---

* [訳者注]　Soja の代表的な著書, *Postmodern Geographies*, (Verso, 1989)には、本論文と同じタイトルの章が設けられているが、本論文のこの章からの記述が著書ではまったく書き改められている。本論文の以降で特に言及される中心ー周辺構造の議論は影を潜め、グラムシからルフェーブルまでの、日常生活の現象学の空間化を顕在化し強調する歩みに特に着目している。「どんな社会革命も、同時に意識的な空間革命でなければ成功できない。…われわれは今日、空間の分析にとりかからねばならないのである。〈空間〉が明確化されれば、革命的な空間意識の可能性、空間の生産を自らの下に管理することを目指したラディカルな空間的実践の物的・理論的な基礎などが明らかにされるだろう」という表現で締めくくられる。

に関しての重要な一群の仮説がある。独占資本主義の勃興、その世界規模への拡張、そして国家の役割にますます依存してゆくことが、現在の資本主義的社会構成体と革命的な階級対立に、新しい歴史的（そして空間的）な状況を導入したと解釈されたのである。他の諸効果の中で、この新しい状況は、マルクス時代の競争的な資本主義下での都市問題の扱いに特徴づけられたそれとは異なる、都市や都市化プロセスに対するアプローチを求めていた。都市は、生産や蓄積の中心としての役割だけでなく、労働力、交換、消費の観点からの資本主義社会の再生産としてのコントロールの場としても見なされるのである。資本蓄積に役立ち、危機を管理するための都市空間を組織化しそして再組織化しながら支配階級のためにつくす都市計画は、国家の手段として捉えることによって批判的に検討された。彼の注目は特に、労働の場（生産点）での矛盾、住宅や建造環境をめぐっての階級対立、国家からの供給や公共施設の配置、コミュニティや近隣の経済開発、金融組織の行動やその他都市空間が、消費や再生産のためにどのように社会的に組織化されるかといった他の論点に向けられていた。このように特定の空間的問題構制が、理論的考察とラジカルな社会行動両方の舞台に登場させられたのである。

こうした研究の進展に対して多くの正統マルクス主義者は、潜在的に破壊的な改良主義だとして、マルクス主義的理論と実践における生産の優位性を唱える。あるレベルにおいてはこうした反応は合理的なものであった。生産から消費を分離する、そして社会と歴史においてかなりの自律的な強さを消費に与え、たとえば消費の特質に向けて階級をまず定義するといった努力は、ブルジョア社会科学や歴史唯物主義に対する議論への対抗を典型的に生み出した。加えて、空間分析に与えられた強調は、過去のそれに匹敵するような空間決定主義の新たな一変形だとする恐れをも引き起こした。新しい都市の政治経済が消費主義者に接したままで、生産関係の中に彼らの空間関係を関係づけない限り、強力な批判的反応の餌食になったのである。

しかしながらたいていの場合、分配や交換、共同消費を強調しても、それが生産の中心的役割を否定するものではなかった。と同時に、歴史的にマルクス主義的分析において相対的に無視されてきたが、先進資本主義における階級分析や階級対立により適切なものであるという事実への注目を呼びかけたのであった。この意味において、マルクス主義的都市分析は西洋マルクス主義の批判的伝統の中に確固としてあったことになる。その上マルクス自身も、同じ過程のある契機と弁証法的に関係づけられるものとして生産と消費をみていた。資本主義的搾取の焦点となる剰余価値は、商品の生産にとっての人間労働の採用の中で出てくるだけである。しかしこのような剰余価値は、交換の結合やしたがって消費のプロセスを通して実現されない限り、またそれまでは、抽象的で潜在的なままなのである。こうした連鎖を断ち切りひとつの契機を打ち立てるには、マルクス自身のプロセスの概念化を極度に単純化することである[15]。

しかし消費や再生産への強調が効果的に正当化されてきたとしても、マルクス主義的な空間分析の再生を擁護してゆくような努力は非常に少なかった。マルクス、エンゲルス、レーニンの古典的著作の中に強い地理的空間的な指向があり、現代資本主義のコンテクストの中でこうした古典的観察を抽出し詳査する重要性のあることは広く受け入れられている[16]。しかしより広範な弁証法的歴史唯物主義的なコンテクストにおいて、なぜ空間分析が1世紀の間事実上無視されてきたのかを説明することや、先進独占資本主義という変化状況のもとで、空間の社会的生産が本当に資本主義の延命に中心的役割を果たすのかどうかを探求するといった、空間の役割に直接焦点を当てる試みは、空間のフェティシズムへの恐れの前に屈していた。結果として、マルクス主義的空間分析は、付属物的扱いになってきているが、マルクス主義的国家論の探究といった都市の政治経済により多く注目が注ぎ込まれるようになってきた。

以前に見定められていた3つの異なる空間分析アプローチはより明確になってきた。正統マルクス主義者の擁護者たちは、マルクス主義的空間分析からいかなるフェティシズム的な芽を摘み取ろうと眼を光らせていた。第2のグループは、重要な貢献をし続けようとしていたが、空間の問題構制からは脇にそれる嫌いがあり、空間の批判理論のさらなる展開を拘束することになった。最後のグループは、彼らの研究を却下したり、非難叱責、批判や誤った解釈が日増しに増えているにもかかわらず、大胆にマルクス主義的空間分析を推し進めている。空間の理論に関する議論を再開させる努力の中で、この集団を最も代表しているアンリ・ルフェーブルに焦点を当ててみる。

**都市革命と空間的実践**

全体としてルフェーブルの著作は、マルクス主義思想の教条主義的な締め付けに生涯かけて抗しようとするものであった。最初はたぶん、1930年代第2インター下、スターリン主義や正統派生産至上主義者を批判するフランスマルクス主義者のリーダーであって、その後、実存主義者や構造主義者の還元主義に対する強力な批判家として活躍した[17]。常に新しい哲学的発展にオープンで、物的状況の変化に適応するマルクス主義の維持に努めながら、ルフェーブルは決して、マルクス、レーニン、ヘーゲルが築いた基礎に自らの研究を根づかせようとはしなかった。彼の考え方はいくつかの論点に対しては過度に折衷主義的であるが、マルクス時代の競争的な産業資本主義の時代から、今日の先進独占資本主義に至るまで、どのようにしてなぜ資本主義は延命できたのかという探究に大きく焦点を当てている。

こうした探究において、ルフェーブルは、究極的には彼の主要公理を導く（彼が呼ぶところの）一連の綿密な概略を提示する[18]。

> 資本主義はこの1世紀の間、内部矛盾が弱められる（解決されるものではないにしろ）ことを発見した。そしてたえず、『資本論』が書かれてから100年もの間「成長」することに成功したのである。空間を占有し、空間を生産することによって、その価値を計算することはできないが、その意味を知ることになったのである。

この先進資本主義的空間の生産は、直接生産の社会関係の再生産に結びついていた。すなわち、全体としての資本主義システムが、自ら定義した諸構造を維持することによって、その存在を拡大してゆくその手段の再生産である[19]。ルフェーブルが論じるこの核心に触れる「発見」は、これ自体マルクスの後期の著作にのみ明示化されたものであるが（特に第2次世界大戦の後になってようやく手にできるものであったが）[20]、空間の批判理論を打ち立て、ラジカルな空間的実践の基礎を創造するルフェーブルの努力をうまく定義する前提の枠組みをいくつか構成する。

ルフェーブルは、社会空間（先進資本主義の中で本質的に都市化された空間）は、生産の支配的関係が再生産されるところであるという考え方に基づいている。こうした諸関係は全体として社会の中ではなく空間の中で再生産されるのであり、具体化された生産される空間として、先進資本主義にますます占有され、断片化され、バラバラの商品として均質化され、規制を配分することが組織化され、世界規模に拡大してゆくのである。資本主義の延命は、この空間の占有と生産にはっきりと依存しており、そして官僚制的にコントロールされた消費や、中心と周辺への分化、日常生活への国家の浸透を通じて達成される。資本主義の最終的危機は、従って生産関係がもはや再生産しなくなったときに訪れるが、それは生産そのものが単に停止するときではない[21]。そして階級闘争がこの脆弱なポイントを包囲し焦点を合わせなければならない。すなわち空間の生産、搾取の領域的構造、そして全体としてのシステムのコントロールされた再生産にである。土地を持たない小作人、無産化したプチブル、女性、学生、そして労働者階級そのものといったような、先進資本主義が押し付ける空間的な組織化によって搾取されるすべての人々を含んだ世界の無産階級の闘争のひとつでなければならない。先進資本主義諸国では、闘争は、『都市の権利』のための戦う『都市革命』の形態を取り、資本主義国家の領域的な枠組みの中で『日常生活』に対してコントロールするのである。発展途上国では、資本主義の世界的構造の中で支配する中枢と従属する周辺という押し付けられた構造に関して、領域的な解放や再構成に焦点が合わせられる。

こうしてルフェーブルは、社会的に組織化された空間の構造や矛盾の中に階級関係を埋め込むことによって、階級闘争の中に空間的問題構制を中心的位置に押し上げた。彼は、空間的問題構制がいつも中心的であるとは論じていない。というのも、特に資本主義的社会関係（競争的な資本主義のもと、主に市場に任している）の再生産をコントロールする要求が日増しに増えてくることに関して、この問題構制の重要性が時間を通じた生産力の発展を反映するからである。また彼は階級闘争の代わりに空間闘争が置き換えられると主張しているわけでもない。その代わりに社会革命は、同時に意識的な空間的革命なしに成功しないと論じる。従って空間的実践が必須となり、それは包囲してゆく社会－空間的実践の一部として常に必要となるのである。

こうした背景をもとにすれば、ルフェーブルの特に都市関係の著作で提示されるいくつかの議論含みの概念や議論の内容や意味を明らかにすることが可能にな

る[22]。たとえば、剰余価値の第1（工業）回路と第2（金融）回路間の歴史的関係についての、ハーヴェイに翻訳された彼のコメントを取り上げてみよう[23]。

> 工業部門での世界的な剰余価値の比率が減退するとしても、投機や建設業、不動産業の発展でその比率は伸びてゆく。第2回路が第1回路に取って代わるのである。

ルフェーブルが主張するのはこの見方であり、「工業化はかつてはアーバニズムの生産者であったが、今やアーバニズムによって生産されているのである」。なぜなら、この第2回路は建造環境の操作、都市的地代の抽出、そして共同消費のための都市空間の組織化、これらすべてのケースは国家の増大する役割によって促進されるが、こうしたケースに深く包摂されているからである。ハーヴェイの翻訳からは、ルフェーブルは剰余価値が第2回路でつくられているとは述べていないが、比率が大きく伸びていると言っているだけであるようだ。これにはちょっと説明が必要であろう[24]。剰余価値の実現は、時間の経過とともに、直接的な工業生産における支配的な包含から、流通／消費プロセスへの包含、あるいはより適切に言えば、生産手段の再生産から、労働力と一般的な社会秩序の再生産にシフトしているという考え方に、ルフェーブルの議論は寄り立っている。これは「経済成長や工業化が一番の問題となっていた時代から、都市の問題構制が決定的になる時代への変化」と関係してきた。

この議論は、ますます都市化され、独占寡占化され、世界化した資本主義的な社会における、労働力と生産の社会関係の再生産にとって必要な剰余価値の比率は、工業生産が生み出すそれよりもはるかに大きいものとなってきたことを示唆している。工業から生み出される剰余価値が減少するのではなく、非生産的活動に資本が拡散してゆくことが、独占資本主義経済での構造的な重要問題となると言われている。代わりに示唆されていることは、ますます増える剰余価値は、独占的な工業化での資本の集中を通じて生み出され、世界規模で資本も蓄積するが、労働の再生産と生産の社会関係の維持のコストが著しく増大してゆく。そこでは共同消費が、支配的とまでは言えないが、価値の実現や階級闘争そのものの実現のための、主要な土俵となってきた。

独占資本主義の勃興に関連したこの歴史的なシフトに関して、ショウクリ・ローヴァイス Shoukry Roweis はより詳しくはっきりした議論を提示する[25]。

> 我々は初期から後期資本主義へのシフトに付随する階級対立の軌跡に明白なシフトを見出す。初期資本主義の主要な問題は生産の問題であった（すなわち、十分でない供給の総計であり相対的な欠乏の問題）。このような状況下では、階級対立は余剰生産の分割をめぐってであり、具体的には、対立は賃金／利潤の争議に集中しながら、就業の場に集中する厳密には労働／資本の対立である。
>
> 現代の資本主義では、この現象はもはや真実ではない。生産の問題は過剰生産の問題に道を譲った……労働が一方で（職場での闘争で）手にしたものは、他方で（都市の生活の場で）失ってしまったのである。国家の介入が強まり拡大してゆく中で、賃金闘争はその意義を失い始め、政治的／行政的権力との闘争が非常に決定的なものとなってきたが、その闘争は未追求である。同時に都市化の進行がたゆまず続き、こうした闘争の多くは明白な都市的特徴を獲得する。簡単に言えば、闘争は（商品やサービスの）生産の局面から、再生産（向上しないにしても安定した都市生活水準の維持）の局面へとシフトしたのである。

競争的産業資本主義もまた、（独占資本主義の増大での）資本の中央への集中化がますます進行すること、社会コントロールの牽引車として国家の役割が劇的に増大したこと、そして世界規模で蓄積が発展してゆくこと、こうした3つの現象に結合した一連の構造的変化を通じて、拡大し変容することができた。しかし根本的な矛盾は取り除けてはいない。こうした矛盾は代わりに生産点での資本と労働の直接的な対立だけでなく、集中的に共同消費や再生産の分野でもまた現れるようになった。競争的な資本主義のもとであったにしろ、エンゲルスは、「住宅問題」をめぐる対立における消費を基盤にした労働階級の戦闘性は、（改善された住宅条件をプレイオフして所得減にあわせた家賃引き下げを行うか、劣悪な住宅条件を取り除くよりは他の場所に移してしまうかのどちらかによって）ブルジョア自らの利潤となって解決され、このような消費を基盤にした闘争は、もはや簡単には吸収され得ないと論じた。産業資本主義の状況下とは異なり、剰余価値の実現、そして資本自体の蓄積は、生産手段とのそれと同様に消費／再生産手段に対するコントロールに、たとえそれがつまるところ同じ権力に握られているにしろ、依存するようになってきた。

こうして資本主義の変容はますます社会的そして空

間的闘争の周りで進行し、そこでは賃金闘争と消費を基盤にした闘争があい混じり、労働者と消費者双方の組織化と意識、言い換えれば社会の垂直的水平的階級分断に固有の搾取的構造から闘争は生じるのである。階級闘争はこうして社会的空間的実践の接合に包含される。

**金融資本と階級闘争**

上述の議論をより正確に叙述し、今日の空間分析の3つのアプローチ類型を例証するために、独占資本主義都市での金融資本の役割についての議論を考察してみよう。たとえば、主導的マルクス主義的都市分析家であるマイケル・ハーロウ Michael Harloe の次のような言明を見てみよう[26]。

> 一般的に都市において生産資本よりも金融資本の役割をハーヴェイが強調していることが批判されている。しかし彼はルフェーブルほどは極端ではなかった。ルフェーブルは、生産よりも流通に関わる金融資本が社会における支配的権力を有していると見なし、都市での対立は、土地投機における資本や土地の役割に基づき、職場での対立に取って代わると考えているが、この理論はカステルによってこっぴどく批判されている。しかしハーヴェイはこれは明らかに起こり得ることと見なしているが、金融資本は生産資本に対してはあくまで補助的であり、なぜなら究極的には剰余価値から富が抽出されねばならず、最終的な分析において生産資本に従属するという理由からハーヴェイは批判される。

こうした生産資本の優越に対する主張は、金融資本は「明らかに支配的であるかもしれないが、支配的役割はやはり生産資本にある」という結論に要約される。ルフェーブルは和解できないほど逸脱しており、ハーヴェイは危険なまでに曖昧で混乱しており、一方で生産は崇高であり神聖な統治をするという結論になる。

しかしながら一番の問題は、「つまるところの分析で」、金融資本が生産資本に優越するかどうかではなく、資本の分派として、特定の社会形成の中で他の資本の分派とどのように関係しているか、階級的行動にどのような影響を与えるかの問題である。こうしてこの論点は結合的なものであり、ある特定の場所での特定の時期において現れる階級関係の総体に言及するものとなる。マルクス主義的分析を究極的な構造的決定の主張に還元することは、すべての歴史的地理的な特殊性を無視してしまい、分析の主題としての都市も排斥してしまうことになる。ではわれわれはどのようにして現代の都市化プロセスにおける金融資本の役割を評価できるのであろうか。

ルフェーブルは、剰余価値の実現においてますます強まる金融資本の重要性を明白に強調しているが、彼は金融資本と他の資本分派との間の関係を明確に特定しているわけではない。彼は、金融資本と生産資本が永続的な対立をしているのか、あるいはレーニンの帝国主義理論で述べられているような、協同組合的な結合に合体されるのかどうか直接的には主張していない。金融、産業、土地資本の間の関係の性質は、私の信じるところ、分析の余地は大いにある。

マシュー・エーデル Matthew Edel は彼のすぐれた地代論研究で次のように論じている。デイヴィッド・ハーヴェイらは、ルフェーブルとは対照的に、同じ論点に対して、特有なものでありながら両立しがたいポジションを取っている。時には、金融資本は別々の資本分派として、寄生的な独占部門がさもないと別の住宅に使用されるような資金を吸い上げてしまうものとして、そして産業資本と直接的に対峙しているもの(そこから地代という形態でもって余剰部分を抽出できる)と見なされているとする。しかしながら別の時には、ほとんどレーニン的見方だが、生産プロセスの全体をコントロールしながら、独占帝国主義段階の産業資本に金融資本は合体されるものとも見なされている。エーデルは、2つの概念は明らかに異なる状況を述べており、一方は大資本家間の対立にあり、もう一方では資本家は統合されていると見ている。彼は次のように付け加える[27]。

> 金融資本への2つの見方は、両立するものではないが、労働階級には異なる戦略的な示唆を導いてくれる。最初の定義が有効であるなら、そして金融独占あるいは金融差別が労働者一般や特定のゲットー集団に対して住宅金融を不足させるのであれば、金融機関の差別的店舗展開規制法、連邦住宅銀行、あるいはローン支払いのモラトリアムを含めた反独占をかかげて対抗する戦術は意味がある。しかしながら、第2の定義が適用され、ひとつの統合された金融資本集団が、住宅と雇用双方をコントロールするならば、住宅コストの減少は賃金の減少を招くかもしれないことになる。ハーヴェイが示唆するように、蓄積が当面の生産プロセスで賃金を低下させることによって、そして消費部門での操作によって蓄積が起こるかどうかについて、金融資本は無関心であれば、資本主義の下で経済的利益を得るために、賃金所得者として同時に消費者として労働階級を組

織する必要性が出てくるあろう。しかし消費闘争側での戦術の誤りは、賃金闘争に不利な影響を与え、その逆もしかりということで、ここで勝利するのは難しい。

エーデルによって金融資本の役割から生じるさまざまなその他の論点がうまく要約される。彼は、理論的には両者の見方は可能だろうが、ハーヴェイは2つの立場で行きつ戻りつしているのではないか、そして「都市問題」に対して彼がとろうとしているスタンスが内在的にあちこちに依拠しており、その反映か、彼の議論を「説得的でない」ものにしていると私は思う。

エーデルが結論づけるように、金融資本と産業資本の間の関係の性質は、歴史的に決定付けられているもの、従って明らかに変化を受けやすいものとして見られなければならない[28]。1970年代の不況の初期局面では、金融の防壁は主要な効果を有していた。すなわち金融資本は大都市の中心部の変容に大きな役割を担い、都市を再生し、低所得者用住宅供給を減少させながら、金融資本組織のためへのスペクタクル的新しい中心をこしらえ上げていた。しかし経済不況が深まると、実質賃金の切り下げへと重荷が転化し、消費と生産関係をめぐる両面の闘争の必要性が生じてくる。ここでエーデルは、銀行業や土地地主といった資本のひとつのセクターのみへの攻撃はもはや十分ではないと論じる。

非生産的な金融資本は現代独占資本主義の構造の中で重要な要素となってきたが、それは剰余価値の実現を生産資本に取って代わって行なうからではない。生産活動や生産手段の再生産に直接関係しながら、労働力や社会秩序の再生産、共同消費の中で、剰余価値の吸収を急速に担うようになったことが重要なのである。競争的な資本主義のもとでは、生産と消費の両者において都市空間の組織化は、総じて市場諸力や民間不動産資本、労働や原料そしてインフラへのアクセスをめぐる工業生産者どうしの競争に任されていた。産業資本主義都市は、基本的には生産マシンであったし、そうであるからまた同じような空間構造が作られたし、産業資本主義的な世界の多く場合として、エンゲルスのマンチェスターの描写、あるいはその後の都市生態学者らによって知覚的に描写された構造であった。

この状況のもとで、都市の文脈から金融資本は相対的に重要ではなかった。しかし資本主義の帝国主義的な伸張のもと、都市における生産マシンのキャパシティが消費のレベルを超えてしまい、賃金の実質レートの低落や階級闘争に直面すると、金融資本は主要な役割を果たすことになった。世界的な規模での再生産の伸張と独占資本主義の成長は、先進資本主義の中心において資本の集中を大きく強化し、インフラ投資、共同消費の拡大、階級対立をコントロールするといった圧力も増加させた。かつてないほど、特に、帝国主義的拡張では政治経済の中枢となる諸国での階級対立や経済危機が除去できないことがはっきりした時、都市空間の再組織化への介入の必要性が生じ、資本の集中化のためだけでなく、社会化された消費を通じた剰余価値実現のためにも、より効果的な都市システム機能を必要とした。

独占資本主義都市ではそれゆえに、金融資本は、互いの競争だけでなく、よりしばしば独占産業資本との連携の中で、産業資本主義都市の時代よりもより重要なものとなった。国家と並んで、金融資本は消費のマシンとして、奢侈物をニーズに変換し、郊外化やそれに付随する民間消費（特に自動車、家庭耐久消費財）を促進し、労働者階級を分化した／領域的な分裂に向かわせながら、都市を再編成する基本的な手段となる。また国家と結合しながら、都市的土地へのコントロールにおいて小規模な不動産資本に置き換わり始めたが、興味深いプロセスであるが、その反響は十分には探究されているとわたしは論じたい。マルクス主義的都市研究の中で最も明白になり、そして重要なものとなったことは、実際にここで付け加えられるべきものであるが、こうした構造的な変化がかつての矛盾を解決できないことにある。もちろんこうした変化は新しい矛盾を生み出したことは、カステルの『ワイルドな都市』で描写され解釈されてきたが[29]、これらは、生産関係や消費の「不均等発展」の中ではなく、これら両者の接合の中から起こる都市を基盤とした階級対立に根差しているのである。

## 地域的国際的な空間的問題構制

都市政治経済における空間フェティシズムに対する批判に併行して、マルクス主義的地域分析における空間的不均等や中心－周辺関係を強調することに対する激しい議論もあった。こうした強調は階級闘争や階級分析からの偏向として、また生産の社会関係から許容し得ないような自立した構造を作り上げている、ブルジョアの妄想と見られている[30]。こうした攻撃に対す

る私の答えはやはり同じである。すなわち資本主義下で組織化された空間構造には、社会階級構造からは分かちがたく相同的な基本的な関係が存在し、そして各々の構造は生産の一般関係の一部分を形成するという答えかたである。理論と実践における階級闘争の垂直的関係と水平的次元間の結合は、より明快な空間の問題構制を導入するような多くのマルクス主義的概念の再考と、マルクス主義の正統派の再主張によって不必要までに犠牲を強いられていることへの再考を必要としている。

地域的な政治経済に関するこうした議論の構築は、マルクス主義的都市分析が空間理論の議論について明示的でないので、より難しいものとなっているし、これもごく近年表面上に現れきたものである[31]。イマニュエル・ウォーラーステイン、サミール・アミン Samir Amin、アルギリ・エマニュエル Arghiri Emmanuel、アンドレ・グンデル・フランク Andre Gunder Frank そしてエルネスト・マンデルの著作からその解釈が得られだしたのであり、彼らは、資本主義下の拡大する再生産に関する洞察深い、しかし総じて非空間的分析に付随するものとしてであったが、地域政治経済に関してうまく諸事実を見つけ出し、大きな貢献をしたのであった。以下で述べることはそれゆえに、既成の立場やスタンスに対する批判というよりも、いくつかの議論を継ぎ合わせたものである。

## 地理的な不均等発展

地域的そして国際的なレベルでの空間の問題構制とそれから派生する社会的な問題は、根元は不均等な地理的発展と、資本主義の成長、延命、変容に帰される重要性に依拠している。ちょっと違った言い方をすると、地域や国家の不均等発展は、資本による労働の直接の搾取としての資本主義に根本的なものであるというマンデルの主張を、どれほど受容できそれに依拠できるかということにかかってくる。

最初に、純粋で均質的な（地理的に分化していない）条件のもとでの資本の運動の一般法則に関する分析と、ある特定の社会構成体間あるいはその中での具体的な状況の分析とは、明確に区別される必要がある。前者では、時間と空間の特殊性から抽象されて、構造とプロセスの根本的な論理はもちろん非空間的である。『資本論』におけるマルクスに従えば、資本主義は、不可避的に危機と階級闘争に導くような、生産の諸力と諸関係間の内部矛盾に基礎を置く生産システムとして暴露されうるのである。この資本主義の本質的に理論的な分析は、時間と場所の特殊性から自由な一般法則という観点からして西欧諸国での概念化に強く訴えられてきたものであったが、地理的な不均等発展は不適切なものというだけでなく、定義されてこなかったのである。

運動の一般法則と生産プロセスにおける労働と資本の間の矛盾に基礎を置くマルクス主義的分析は、資本主義のはかなさと内在的な自己破壊的性格を論証している。しかしそれ自体によって資本主義がなぜどのようにして存続してゆくかは説明されていない。この説明には、再生産プロセス、特に資本主義の拡大する再生産にもっとダイレクトな着目を払う必要がある（単なる再生産だけでは資本主義の存続は保証できないので）。資本の運動法則が、その具体的な歴史的地理的コンテクストに、そして拡大する再生産の進展する枠組みの中でこうした法則が時間と空間のもとにどのように説明されるかに関係づけられるときに、不均等な地理的発展の役割が非常に重要なものとなってくる。

ここでわれわれは、先で論じた都市の問題構制と地域的／国際的な問題構制の間に直接の関係を持つことになる。抽象的形態としての正統派マルクス主義理論への訴えにより定義し損なわれていたが、再生産のコンテクストのもとで具体化され、どうして、どのようにして、資本主義はマルクスの時代の競争的な産業資本主義から、今日の独占資本主義まで延命できたのか、これがルフェーブルの中心的な問題提起であったが、これに対する反応で最も明確に析出されてきたのはここで言う空間の役割であった。従って、地域の政治経済学への主要な貢献が、最初に帝国主義理論の発達と関連し、その後に世界規模での蓄積、資本主義的世界システムの発展や不均等交換や不均等発展のさまざまなプロセスの分析に関係してきたのは、偶然の一致でも何でもない。こうした貢献のすべてには二つの共通する側面がある。第１にこうした貢献は、拡大する再生産のプロセスに焦点を合わせ、非資本主義的、準資本主義的、あるいは少なくとも完全に資本主義的とは言えない生産関係の存在を認識していることである。加えて、こうした貢献は、資本主義の拡大する再生産に対して、階級闘争を世界レベルにうまく位置づけ、そのめざすゴールも適切に方向づけているのである。

では、拡大する再生産の枠組みの中でどのようにし

て不均等な地理的発展の役割を定義することができるのであろうか。最も基本的には、資本主義の歴史的な延命は、我が物にした空間を過剰開発するか、未開発のままにしておくかという差別化に依存していると論じることができる。マンデルは、地域の未開発は資本主義の普遍的な現象であり、労働予備軍の大きなエリアと補助的な市場を自らの備品とするこの基本的な役割は、資本主義的生産の発作的、不均等な矛盾した発展に反応できると観察している[32]「もし延命するために、労働人口のすべてが自ら住む地域で職を見つけるのであれば、産業資本主義の突然の拡大から自由な賃金労働の予備軍はもはや存在しないことになる」[33]。こうした労働予備軍が人口の「自然」移動によって生み出されられない時には、直接の権力行使かその他の手段で人為的につくり出される。

労働予備軍空間の創出は、「過剰発展する」蓄積の中心地において、資本のために重要で補完的な市場を供給することにもなる。発展の中心地における余剰生産の市場として貢献する、経済的に窮乏した労働予備軍をこのように組み合わせることは、不均等交換、あるいはより広範な地理的な価値の移転といった体系を通して維持され強化される。マンデルは次のように述べる[34]。

> もし利潤率が、産業のすべての分枝においてと同様、国家内のすべての地域で、世界のすべての国でいつも同じであれば、人口移動で必然的に起こる以外の資本蓄積はないことになる。そしてこのこと自体、結果として起こるような深刻な経済不況のインパクトによって順次修正されることになろう。

『後期資本主義』の著作においてマンデルは、地理的な不均等発展、地理的価値移転と部門的なそれとの間の関係が重要であることを、歴史的にきれいに統合して提示してくれる。彼は、拡大再生産のプロセスにおける根本的な矛盾、すなわち利潤率における、より広範な捉え方をすれば、生産諸力の発展における差別化と平等化の間の矛盾の上にこの統合を打ち立てようとしている。競争的な資本主義的生産関係の発展が、部門間と地域間の利潤率の平等化の傾向に向かわせる一方で、独占資本主義下の拡大生産は、（平均的というよりは）「超過利潤」の抽出に依存し、そしてそれが部門的そして／あるいは地域的な差異を要求することになる。こうして、資本主義的生産様式の実際の成長プロセスは、利潤率（あるいは資本の有機的構成）を効果的に平等化することはないとマンデルは主張する[35]。

> こうして均質的な始まりという「理想的な事例」においてでさえ、資本主義的経済発展とは、資本の再生産と蓄積を拡大させながら、発展と低開発の併存とその継起的な組み合わせとやはり同義になってしまうのである。資本の蓄積それ自身が、資本の不均等なそして組み合わされた運動の相互に決定的な諸契機として開発と低開発を生み出すのである。資本主義経済において均質性が欠如していること、それは資本それ自身の運動法則を開陳してしまう必然的な結果だといえる。

自由で競争的な資本主義時代において、農村部周辺そして都市と地方の間の地域的低開発状況は、超過利潤の主要な源となっていた（国民市場とブルジョア国民国家が統合されそこで限定されてはいるが均質化が見られるようになるまでに）。古典的な帝国主義時代では、この源はまず（しかし排他的にではなく）帝国主義的国家の発展と植民地、半植民地的諸国における低開発の併存状況に移行してゆく。マンデルの後期資本主義の概念化の中では、焦点が当てられているのは、部門の問題であって、急成長を遂げる部門とそうでない低開発状況の併存組み合わせへの注目である[36]。全体の資本主義システムは、こうしてそのもとから、超過利潤への欲求から解き放たれることのない国家、地域、産業の諸分枝、工場などの不均等発展から生じる異なる生産性水準からなる階梯的な構造として立ち現れるのである。

ここで議論すべきことは、資本主義の発展が、いくつかの地理的不均等がすべての社会プロセスの結果であるから地理的に不均等になるということを単に述べることではなく、資本主義的生産様式は、その延命の手段として、地域的あるいはより広く空間的な不平等を実際に作りだし、強化し、維持しようとしている点を論じることである。同時に資本主義の継起的な拡大は、地理的な差異をなくし均質化させるという相反的な傾向もあわせ持っている。差別化と平等化の間の弁証法的な緊張は、不均等発展プロセスに潜在的なダイナミクスといえよう[37]。不平等は発展の内在的な水平性を無視し、ただ部門間、分枝間、工場間の垂直的な差異だけを見ることは、不完全で過度に抽象化された非弁証法的なマルクス主義に止まるだけであり、資本

主義的な生産様式の歴史を十全に理解できない（そして変革することもできない）。

**中心－周辺関係**

不均等発展が本質的に空間的であると主張するだけでは不十分であろう。地理的な不均等発展を維持するある特定のメカニズムを同定し、それが資本主義の再生産の拡大にどのように関係するのかを特定し、そしてどのように階級関係や階級闘争と関係するのかを説明する必要がある。過去20年間、いくつかの重要な貢献がこの方面で見られたのであるが、強い抵抗やしばしば後ずさりする場面があったし、結果的に地理的な不均等発展に関する厳格で首尾一貫して包括的な分析は、いまだ存在していないのである。

たとえば中心－周辺関係の分析を取り上げてみよう。生産、搾取、そして蓄積の行われる支配的な中心と、従属的、依存的、搾取される周辺との対立は、基本的には地理的不均等発展のプロセスと、平等化と差別化のダイナミックな緊張から生じる水平的構造となって表される。根本的には社会階級の垂直的な構造と相同的であり、その点において双方とも、資本主義的生産様式そのものを定義する資本－労働間の同様の矛盾に根差しているといえる。その意味において、中心－周辺関係は、ブルジョアとプロレタリアを規定する同じ生産の基礎的関係の空間的表現となる。社会的、そして空間的構造は両方とも、生産手段へのコントロールに根ざした搾取的関係によって形成され、そして支配的社会階級による価値の占有によって維持されるのである。階級対立は、資本主義の社会的空間的な構造を合わせた搾取的な性格にますます意識的に対処することによって嵩じ、両者の同時的変革をめざすことになる。

社会的として空間的構造の関係を明確にすること、そしてグローバルからローカルといった多重的なレベルで作用するこの組み合わせを強調すること、このふたつのことがうまく説明できなかったので、「低開発」理論や「従属」理論学派に向けられた批判や大きな混乱を招くタネをまいてしまったといえる[38]。多くの観察者にとってこの学派は、周辺資本主義諸国に見られる貧困、搾取や不平等の因果関係の説明を、もっぱら中心諸国の掌中にあることのせいにするとか、植民地主義的、新植民地主義的支配のある形態にもとずく国際分業のせいにすることで、階級関係や階級対立を強調していないようにみえたのである。搾取を中心と周辺の間の完全な領域的なプロセスとして捉えるだけでなく、国家間関係のレベルや単一のレベルで基本的には作用しているプロセスとして見る必要もある。資本主義的世界システムの歴史的な出現の中で、この国際的な低開発のプロセスは非常に重要であるが、国家間と同様に国家内での階級関係を貫く階梯的な構造の中で作用するものとして、資本－労働間の垂直的対立と関連させながら理解されなければならない[39]。

この中心－周辺関係についてマルクス主義的な視点から最も重要な貢献を行った最近の研究は、イマヌエル・ウォーラーステインから生み出されたといえよう[40]。彼は資本主義的世界システムが、階級（ブルジョア対プロレタリアート）と、空間的階梯（中心対周辺）の中での「経済特化」というふたつの基本的な「二分法」をめぐって動いていると見なした。彼はさらに次のように付け加える[41]。

> 資本主義システムの才覚あるところは、ともしあなたがそうであるとすれば、オーバーラップするが互いに同定できない、そしてシステムの文化的政治的な複雑さ（曖昧さ）を作り出してしまうこうした2つのチャネルをうまく織りなしてゆくことにある。そして他と比較しても、こうした才能は、周期的な経済危機の政治経済的プレッシャーに対して、階級階梯をあまり傷つけずに空間的階梯を再編成することによって、うまく対応することができるのである。

ウォーラーステインは確かに低開発理論家よりも明確に、社会－空間弁証法の構造的基礎をよく認識していたのだが、究極のところ、カステルやハーヴェイによって扱われた都市の問題構制に類似した態度に後退する。社会（階級）的、空間的（中心－周辺）構造の間の弁証法的関係と考えられるようなものを提示しながら、結局は空間構造は社会的なものに従属してしまい、階級の階梯に決して影響しない空間をちょっと操ったものとして見られることになる。こうしてウォーラーステインは、記述的メタファーを通じて中心－周辺構造を語ってきたが、マルクス主義的理論における構造的基礎を築き上げることには成功しなかったのである。

**地理的な価値移転**

この中心－周辺関係において厳密な理論的基礎が打

ち立てられなかった理由のひとつに、地理的な価値移転という基本的なメカニズムの働きを明らかにできなかったことが挙げられる。地理的不均等発展は、さまざまな社会的諸構成体間あるいは諸構成体内に見られる、労働の生産性、利潤率、資本の有機的構成、そして可変資本のコスト（特に賃金率や再生産費用）の地域的差異の結果として現れる。直接交換がなく、統合された世界資本主義市場の中で共存する中、如上の違いが相当ある地域間での交換は、支配的中心と従属的な周辺との間で、差別化された蓄積と価値の実現が生み出してしまう。本稿ではこのプロセスを詳細に示すことはできないが、結果は明快である。すなわち中心での蓄積は、周辺地域からの直接、間接的な価値移転によって増大する一方で、周辺での蓄積は歪められ比例して減少するのである[42]。

こうして地理的な価値移転は、資本の地理的集中と集積の基礎となり、相同的な独占資本の集積と集中に関係することであるが、中心と周辺との間の相対的な資本規模において継起的な差異を作り出し再生産してゆくことになる。この地理的集中はさまざまな形態をとる。キドロン Kidron が呼ぶところの「プラスの集中」は、本質的には原始的蓄積にあたり、周辺、すなわち前資本主義的社会構成体において資本損失のない中で、中心では直接的利益を伴ってゆく[43]。植民地的収税としての貢納や略奪を通じて超過利潤を直接抽出する形態は、マンデルが議論するように、第2世界よりも先に第3世界の大都市的搾取の主たる形態であった[44]。対照的に「マイナスの集中」は、戦争、軍備や「浪費物」の生産、換言すれば、蓄積プロセスから見て、周辺での余剰を非生産的な活動に転換してしまうといった周辺での余剰の破壊を通じて、資本の相対的規模の差異を拡大してしまう。キドロンが「プラスマイナスゼロの集中」と呼ぶさまざまな諸形態、総計に変化はなくとも資本の間に余剰の移転があるところでは、多分今日の文脈において最も注目を浴びるところとなる。これはいわゆる「頭脳流出」、すなわち「援助」を受領して利益や料金、使用料などが正味で流出してしまったり、周辺の資本に対する直接コントロールが多国籍企業に移転したり、多国籍企業集団の中での価格移転のテクニック、そして特に商品取り引きから生まれる不等価交換といった現象を伴う。多くの批判に対して、マンデル、エマニュエル、アミンらは、不等価交換こそが戦後資本主義における地理的な価値移転に見られる支配的なメカニズムであると論じる[45]。こうした論点が統計的に検証されているか否かは別にして、不等価交換理論に関する最近の議論は、地理的な価値移転や、より一般的な地理的不均等発展プロセスの政治的な意味合いを論じる際に、有用なコンテクストを提供してくれる。

サミール・アミンは、地理的な価値移転をめぐる政治的な論争点を次のように要約する[46]。

> システムの中心と周辺の間の関係が、周辺から中心への価値の移転で表される支配関係、不均等関係であるとしたら、世界システムはブルジョア国家とプロレタリア国家という観点から、今はやりのいくつかの表現を使いながら分析されるべきであろうか？ 周辺から中心へのこうした価値移転が、それなしに得られていたより以上に中心において労働報酬に大きな改善が見られるのであれば、中心のプロレタリアートは世界システムを現状のまま保つためにブルジョアと同盟すべき立場をとってはだめなのか？ もし周辺においてこの移転が、単に労働報酬だけでなく地方資本の利潤マージンをも削減するのであれば、国家の経済解放をめざした闘争におけるブルジョアとプロレタリアートの間の国家的連帯の存在理由はなくなるのであろうか？

ここでの意味合いは、ブルジョアとプロレタリアートの間の矛盾が、富裕な国家と貧しい国家との間の、そして不均等な地理的発展から生じる領域的に規定された矛盾に置き換えられるのかどうかという問題である。

もしこのことが真実であれば、この意味合いについてよく考えねばならない。これは世界大の労働階級が和合して行けるかどうかへの挑戦であり、周辺の人々は価値移転を通じて、より高賃金に、労働「貴族」に、相対的な社会的な和合に、中心諸国の福祉のために苦しみを受けていること、そして周辺にとって唯一とるべき径は、国際的な資本主義経済からの解放と対抗をめざすブルジョアとプロレタリアートの階級同盟しかないことを意味していよう。こうした解釈に近い議論は、必ずやマルクス主義的な研究者の間からきつい反論に会うことは何ら不思議なことではない。

一方地理的な価値移転と中心－周辺構造を強調し続けながら、アミンは「社会的平面」の支配を再び主張することによって、こうした観点と関わる政治的な問題を解決しようとしている。「資本主義に特徴的な社会的な矛盾はこうして世界規模になり、それぞれの国で個別に存在するブルジョアとプロレタリアートとの間の矛盾ではなく、世界のブルジョアと世界のプロレ

タリアートとの間の矛盾なのである」[47]。

さてここで我々は、ハーヴェイのルフェーヴル評価に特徴づけられる、2 歩進んで 1 歩後退という事態を抱え込むことになる。社会的空間的な平面の間の弁証法的な関係に直面するよりもむしろ、アミンはそれを社会的な平面でうまくゆくような解決法を見せたが、今や世界規模でそれを表現している。都市の空間構制に関する本稿の最初の方の議論では、私は社会ー空間弁証法が、生産と消費の論点をめぐるふたつの直面する闘争の形態の中で実際に表現されることを論じた。それは一方で領域的な集団性と、他方では一般的な労働階級をリンクしながら、資本主義的な生産と再生産の関係のもとで、それぞれが低開発のままそして搾取されている状況を呈することになる。全く同じ議論が世界システムにも適用できるであろう。こうして資本主義の変革は、水平的（周辺対中心）そして垂直的（労働階級対ブルジョア）階級闘争の組み合わせと接合を通じてのみ、社会と空間の両平面における変革によって起こるのである。

階級闘争のふたつの形態は、ブルジョア的国家主義や地域主義、そして地方主義のもとにある領域的なアイデンティティを操作するという形を特に取りながら、対立的に表わせることができよう。しかし領域的意識が、資本主義的な生産と再生産関係の搾取的性質に基づき、場所への地付き的な情感的な愛着に基づいていないものである時、それは階級意識であるといえる。空間の生産は確かに、資本主義の発展の中で社会的にわかりにくくされ神秘化されてきた。そしてこのことが空間の生産をして階級闘争とは異なった使われかたを許してきたのである。ルフェーブルだと、これがまさしく資本主義がどのようにして延命してきたかを見事に示してきたと論じるであろう。但しそのことが直ちに、空間的意識がマルクス主義的な理論と実践の中で払いのけられたり、因果関係的には従属してしまうというようなことを意味しているわけではない。マルクスが商品形態の神秘を解いたように、空間的関係の神秘を解く必要がある。そしてこうしたイデオロギー的なものの下に横たわる社会関係を明らかにする必要がある。マルクス主義的空間分析が最初に行なわねばならない仕事はこうしたものなのかもしれない。

## 結論

私は、最近の都市・地域経済に関する研究の中で、まだ幼児期にあるマルクス主義的空間分析の今後の発展をストップさせるようなとみに厳しくなってきたパターンに対して、かなり挑発的な対応を行ってみた。空間の物神化や、物的な歴史や社会に空間の力強くて自律的な影響に重きを置くことに見境もない嫌悪を与えることは、歪んだ修正主義に抵抗してきた歴史的な必然性を超えた行き過ぎ行為であり、人間の空間的組織化に関する弁証法的唯物主義的分析を非生産的なものに押しとどめてしまう始まりともなってしまう。こうした行為は、アンリ・ルフェーブルのようなマルクス主義的研究家の重要な貢献の誤解と棄却につながってしまう。彼は多分、空間の社会的生産をマルクス主義理論と実践に適切に統合するという今世紀最大の貢献を行ったのである。

社会ー空間弁証法は生産的で適切な焦点を、資本主義的社会の構成体とそれに一致した社会的行為の具体的分析に与えてくれる。分析的な焦点として、社会ー空間弁証法は、階級分析を覆い隠して、空間そのものをマルクス主義科学における「科学的な主題」のレベルにまで祭り上げたり、生産の基本的関係に関する自立的な構造として空間の組織化を提示することを目指しているのではない。代わりに、マルクス自身が観察するように、一般に生産の社会的関係と社会構成体はその中に、生産のすべてのエージェント（すなわち人々）の位置に影響を与え、同時に社会的空間的分業を形成するような基本的な垂直的対水平的構造を内包していることを、社会ー空間弁証法は明白にまず特定してくれることにある。マルクス主義の発展において空間構造はたいていの場合、外在的なものか偶然的なものとして、故意に非空間化された「社会」的なものという概念の単なる反映として見なされ続けてきたのである。こうして社会ー空間弁証法は、マルクス主義的分析の中で社会的に生産された空間を、付随現象以上のものとして再び取り込んでゆこうとする欲求を代表するものなのである。

しかしながら、資本主義下における生産関係の垂直的水平的な表現が（すなわち階級関係）、同じセットとしての生成的な構造（特に労働と資本の関係）の中で生まれてくるという意味においてこれまた相同的であること、また異なる社会構成体の中やさまざまな歴史的な巡り合わせにおいて変化しうる複雑な相互関係の中で、それぞれが自らを形作りながら同時に他者に

よって形作られるというような弁証法的なリンクの存在を示唆されると、議論はさらに一歩踏み込まれることになる。すべての具体的な歴史的地理的な状況において、どちらかが一方をずっと厳格に支配することはないのである、もちろん社会と空間構造の間の弁証法の歴史的発展は――社会的分業と領域的分業との間の相互作用――、具体的なマルクス主義的分析の中心課題であるべきであろう。

批判的空間分析の本稿での試みは不完全である。少なくとも表面的には有用な記述のための枠組みとして、社会－空間弁証法の出現を受け入れようとする好意的な雰囲気はいくらかあるようだ。しかし空間の生産がもっと深く歴史唯物主義に、生産の諸関係や諸力の基本的な定義に、生産様式そのものに、そして特に実践に根づくまでは、それは変革的なもというよりも随伴現象として、「現実」のものとしてよりも見かけ上のものとしてあり続けるであろう。このような任務は今後の課題としてのものであり、非空間的な独断主義が再び主張されることによって留め置かれるべきものではないのである。

## 注

1) David Harvey, *Social Justice and the City* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1973), p.306.[竹内啓一・松本正美訳『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ、1980 年]。この文章は、Henri Lefebvre, *La Revolution Urbaine* (Paris: Gallimard, 1970) [今井成美訳『都市革命』晶文社、1974 年]からの英訳である。関連するルフェーブルの著作として、以下のものをあげておく。*Le Droit á la Ville* (Paris: Editions Anthropos, 1968) [森本和夫訳『都市への権利』筑摩書房、1969 年], *La Pensée Marxiste et la Ville* (Paris: Casterman, 1972), *La Survie du Capitalism* (Paris: Editions Anthropos, 1973), *La Production de l'Espace* (Paris: Editions Anthropos, 1974). このうち、*La Survie du Capitalism* のみが、*The Survival of Capitalism* (New York: St. Martin's Press, 1976) として英訳されている。

2) 特に、Manuel Castells, *The Urban Question* (London: Edward Arnold, 1977)[山田操訳『都市問題』恒星社厚生閣、1984 年]。これは *La Question Urbaine* (Paris: Maspero, 1972)からの英訳である。

3) 最近のリチャード・ウォーカーRichard Walker によるコメントでは、もっともこれは 1978 年にニューオーリンズで開かれたアメリカ地理学会大会での発表論文に言及したものであったが、空間に鋭敏なマルクス主義者の間においてさえ、（非空間的な）社会というものを「第一」に据えようとする衝動がまだ生きていることを指摘している。ウォーカーは、弁証法的分析は、生産様式の空間的諸関係を既に統合しているが、（価値関係としての）社会関係が基本的なものとして存在し続けていると論じる。しかし価値関係は抽象的で非空間的なまま定義され、にもかかわらず社会的なのである。ウォーカーがこう言うところの「非弁証法的で都合のよい」と叙述することに関しては肯づけるものがある。資本主義の発展のあらゆる歴史的なモメントにおける堅固な構造的な普遍的出来事として、空間関係は非空間化された「社会的な」ものにまとめられ上げられ、そして（非弁証法的に）直ちに社会に従属することを許してしまうところに、弁証法的な論理を立てる作業の都合よい先延ばしがあるのである。Richard Walker, "Two sources of uneven development under advanced capitalism: Spatial differentiation and capital mobility," *The Review of Radical Political Economy*, Vol. 10 (1978), pp.28-37.

4) 『資本論を読む』におけるルイ・アルチュセールやエティエンヌ・バリバルの構造主義的な分析から同様の概念化が見られる。*Reading Capital* (London: New Left Books, 1970), p.180.[権寧・神戸仁彦訳『資本論を読む』合同出版、1974 年） アルチュセールは、「生産関係の構造は、生産の主体的行為 agent、すなわち個人によって占有され採用される「場所」や「諸機能」を決定する」と述べる。主体的行為者と生産の「客体」はこうして、「諸関係、場所、諸機能の配置のある特定の構造の中で」組み合わされるのである。（強調は原文）

5) 空間分析がマルクス主義においてなぜこうも歴史的に発展してこなかったかを説明する試みはごくわずかしかない。ここでは、ルフェーブルの *La Pensée Marxiste et la Ville*（前掲注 1）をあげておく。

6) ハーヴェイの前掲書、第 1 章を見よ（前掲注 1）。

7) ルフェーブルの *The Survival of Capitalism* の第 1 章を見よ（前掲注 1）。

8) M・エンダーズの訳による。M. Enders, "Reflections on the politics of space," *Antipode*, Vol. 8 (1976), p.31.

9) ハーヴェイによる翻訳、*La Revolution Urbaine*,（前掲書注 1）

10) Ernest Mandel, "Capitalism and Regional Disparities," *Southwest Economy and Society*, Vol. 1 (1976), p.43. （強調は筆者）

11) Ernest Mandel, *Late Capitalism* (London: Verso, 1978). （[飯田裕康ほか訳『後期資本主義』柘植書房、1980―1981 年）

12) カステルの前掲書（前掲注 2）115 頁。（強調は筆者）

13) たとえば、Michael Harloe, ed., *Captive Cities* (New York: John Wiley and Sons, 1976) を参照のこと。ハーロウは空間の物神化に関するカステルの分析を賞揚しているが、生産というものが最も重要な妥当性を持っていること

や、いかなるマルクス主義的空間分析にもこうした生産に関わる研究が重要であることをカステルが評価していないようだと述べ、「つまるところカステルの消費に関する（ハーヴェイにそった）分析が、ある点では、彼自身が厳しく以前に批判していたかつての都市社会学やウェーバー主義的都市社会学と比較される事態に陥っている」（21 頁）。

14) 私はここで、バラン Baran、スウィージーSweezy、マルクーゼ Marcuse らの研究に見られるマルクスの「消費主義的」修正と、同様に上部構造分析 vs.狭義の経済主義という今までの広範な伝統に言及したい。Perry Anderson, *Considerations on Western Marxism* (London: New Left Books, 1976)[中野実訳『西欧マルクス主義』新評論、1979 年]を参照のこと。

15) これは *Grundrisse* (New York: Vintage Books, 1973)（訳『資本論草稿集』大月書店、1993）の 90～94 頁に最も明示的に述べられている。

16) ひとつのすばらしい例として、David Harvey, "The geography of capitalist accumulation: A reconstruction of Marxian theory," *Antipode*, Vol. 7 (1975), pp.9-21.がある。

17) Henri Lefebvre, *Le Materialisme Dialectique* (Paris: Presses Universitaires de France, 1939) [本田喜代治訳『弁証法的唯物論』新評論社、1953 年]; *L'Existentialisme* (Paris: Editions du Sagittaire, 1946); *Au-delá du Structuralisme* (Paris: Editions Anthropos, 1971)[西川長夫・中原新吾訳『構造主義をこえて』福村出版、1977 年]. ルフェーブルは初期のサルトル研究に厳しい批判を行ったが、後にサルトルの実存主義的マルクス主義を奉ずるようになった。Mark Poster, *Existential Marxism in Postwar France: From Sartre to Althusseur* (Princeton: Princeton University Press, 1975)を参照のこと。

18) Lefebvre, *The Survival of Capitalism*, 前掲書、注 1 21 頁

19) ルフェーブルは再生産のプロセスを 3 つのレベルを区別している。1) 家族や親族関係の文脈の中で本質的に見られる生物・生理学的再生産； 2) 労働力（労働階級）と生産手段の再生産； 3) 生産の社会関係の再生産。これらすべてのレベルに影響を与え直接介在する資本の能力は、生産諸力の発展でもってずっと繰り広げられてきたのである。

20) 2 分冊の『資本論草稿集』は、ロシア語版で 1939、1941 年に出版され、ドイツ語での初版本は 1953 年に、英語版は 1973 年が初版であった。

21) ルフェーブルは、狭義の経済学的ものの見方、すなわち労働の場での搾取や、（ゼネストのような）労働の一時放棄を通じてあるいは生産の停止（経済恐慌）による革命的な変化に焦点を当てる現代の左派の「労働者主義」と彼が呼ぶところのスタンスを強く批判している。

22) 『空間の生産』が出版される 1974 年までに、ルフェーブルが、生産の社会関係の再生産やより広範な空間の問題構制の中で、都市的問題構制をより明確に提示している。この著書は彼の空間に関する主要な研究であるが、最近の多くの研究の中では無視される傾向にある。

23) Harvey, 前掲書、注 1、312 頁

24) 問題を厄介にしているのは、ルフェーブルは第 2 回路に関して同様に「つくられる」という用語を実際に使用しているのに、ハーヴェイはその翻訳において省略していることにある。もしルフェーブルが剰余価値も第 2 回路においてつくりだされることを言おうとしていたのなら、労働の価値理論とは矛盾するし、マルクス主義的分析として受け入れられないことになる。しかし彼は、価値の生産ではなくその実現に強調をおいているように思われる。本文中の引用文のすぐ後に、原著ではルフェーブルは次のように書いている。「不動産投機は資本形成の主要な基本的な源であり、ほとんど独占的な地位を有するようになる。これがいわゆる剰余価値の実現といわれるものである。」原著、212 頁。

25) Shoukry Roweis, "Urban planning in early and late capitalist societies," *Papers on Planning and Design* (Toronto: University of Toronto, Department of Urban and Regional Planning, 1975), pp.31-32. （強調は原文）

26) Harloe, 前掲書、注 13、25 頁

27) Matthew Edel, "Rent theory and working class strategy: Marx, George and the urban crisis," *Review of Radical Political Economy*, vol.9 (1977), p. 12.

28) ハーヴェイは今ではこの見方を受け入れており、産業資本と金融資本の関係に対する定義が異なる歴史的モメントにおいても適用できるが故に、こうした双方の定義も彼は受け入れると論じる（ハーヴェイとの私信による）。

29) Manuel Castells, "The wild city," *Kapitalistate*, Vol. 4 (1976), pp.2-30.

30) たとえば Ann Markusen, "Regionalism and the capitalist states: The case of the United State," *Kapitalistate*, Vol. 7 (1978), pp.39-62. を参照。マルクーセンは、「若い世代のマルクス主義研究者は無意識のうちに、分析的な焦点としてのプロセスの動態に固執するよりも、場所や事物に特徴を見出し、それに帰してしまうようなブルジョア社会科学の傾向を模しているだけだ」（40 頁）と批判する。

31) 特に、*Review of radical political economy*, vol. 10 (1978) の「先進資本主義における地域の不均等発展」特集号や、Doreen Massey, "Survey: regionalism: some current issues," *Capital and Class*, Vol. 6 (1978), pp.102-25. Alain Lipietz, *Le Capital et son Espace* (Paris: Maspero, 1977). を参照のこと。

32) Ernest Mandel, *Marxist Economic Theory*, Vol. 1 (New York: Monthly Review Press, 1968), p.373 [岡田順一ほか訳『現代マルクス経済学』東洋経済新報社、1972-74 年]。地域的不均等発展は、「たいていマルクス主義的経済学の本では過少評価され」そして「それは外延的な再生産を理解する上で鍵概念である」と見なされている。

33) Mandel, 前掲書、注 10、43 頁

34) Mandel, 前掲書、注 10、43 頁

35) Mandel, 前掲書、注 1 に「第 3 章の「超過利潤の 3 つの主要な源」、85 頁。

36) 後期資本主義においてもうひとつ重要なことは、先進資本主義諸国におけるたとえばニューイングランドの衰退に代表されるような地域的な低開発状況に対して新たな努力が行われることにある。こうした地域の役割の逆転していまうことも新たな地域の危機であり、更なる事例研究が必要とされよう。ニューイングランドを事例にした次のようなおもしろい政治的分析がある。Jeremy Rifkin and Randy Barber, *The North Will Rise Again* (Boston: Beacon Press, 1978)

37) 空間の生産における均質化と断片化との間の矛盾に関するルフェーブルの研究には、このダイナミックな矛盾が併行して見られる。彼は中心ー周辺構造にとって基本的なより深遠な対立的関係としてこれを見ている。こうした相互に絡み合った矛盾、平等化／差別化、均質化／断片化といったものの性質や示唆することに関して、もっともっと研究が必要である。マルクス主義的な空間分析のさらなる発展にはこうした研究が決め手になるであろう。

38) たとえば次のような文献を参照のこと。Andre Gunder Frank, "The development of underdevelopment," *Monthly Review*, Vol. 18 (1966), pp.17-31. Celso Furtado, "The concept of external dependence in the study of underdevelopment," in Charles Wilbur, ed., *The Political Economy of Development and Underdevelopment* (New York: Random House, 1973), pp. 118-23.

39) グンデル・フランクの最近の著作では、低開発と階級析をうまく組み込んでゆく必要のあることを指摘しながら、こうした見方をはっきりと受容している。

40) ウォーラーステインの短編を編集した佳編として、*The Capitalist World-Economy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979)[藤瀬浩司ほか訳『資本主義世界経済』名古屋大学出版会、1987 年]があるし、また、*The Modern World-System* (New York: Academic Press, 1974)[川北稔訳『近代世界システム』岩波書店、1981 年]も参照のこと。

41) Immanuel Wallerstein, "The world system perspective on the social science," *British Journal of Sociology*, Vol.27 (1976), pp.350-51.

42) こうした考え方をより詳しく考察したものとして、Constantinos Hadjimichalis, "The Geographical Tranfer of Value," unpublished doctoral dissertation, University of California, LA, 1980.がある。

43) Michael Kidron, *Capitalism and Theory* (London: Pluto Press, 1974)の第 5 章 "Black Reformism: The theory of unequal exchange", pp.95-123.

44) Mandel, 前掲書、注 11

45) Arghiri Emmanuel, *Uneven Exchange: A Study of the Imperialism of Trade* (New York: Modern Reader, 1972) [原田金一郎訳『新国際価値論争』柘植書房、1981 年]; Samir Amin, *Accumulation on a World Scale: A Critique of the Theory of Underdevelopment* (New York Monthly Review Press, 1974) [野口祐・原田金一郎訳『周辺資本主義構成体論』柘植書房、1979 年]; Samir Amin, *Unequal Development* (New York: Random House, 1973) [西川潤訳『不均等発展：周辺資本主義の社会構成体に関する試論』].

46) Amin(1974), 前掲書、注 45、22 頁。

47) Amin(1974), 前掲書、注 45、24 頁。